

報告

東京都立北園高等学校におけるドイツ語教育の発展と新たな取り組み Developments in and new approaches to German language teaching at Tokyo Metropolitan Kitazono High School

能登 慶和 NOTO Yoshikazu¹

要旨

東京都立北園高等学校は、国際理解教育の一環として第二外国語教育に力を入れている伝統ある学校である。同校では英語以外にドイツ語、フランス語、中国語、ロシア語の4言語を履修することができ、かつ最大で3年間学ぶことが可能である。また、ドイツ語においては2010年にドイツ外務省プロジェクト「PASCH」のパートナー校として認定され、国内外において様々な形でドイツ語およびドイツとの繋がりを構築している。さらに、現在ではドイツの複数のギムナジウムとの学校間交流を実施するなど、日本とドイツの若き架け橋として大きな役割を担っている。本稿は、高等学校における多様な外国語学習の実践、およびコロナ禍における高校生の努力という観点から、近年の北園高校におけるドイツ語教育の発展や新たな取り組みについて報告する。

キーワード:

複言語教育、ドイツ語教育、国際交流、PASCH

Abstract

Tokyo Metropolitan Kitazono High School is a traditional school that focuses on second language teaching as part of education for international understanding. In addition to English, the school offers four other language courses - German, French, Chinese and Russian - which can be taken for up to three years. For the German language, the school became a partner of the German Ministry for Foreign Affairs' "PASCH" project in 2010 and has established links between Germany and the German language in various ways at home and abroad. At present, the school plays a major role as a bridge between Japan and Germany, for example, by engaging in international exchanges with several German gymnasiums (intermediate and high school). This paper reports on recent developments and new approaches in German language teaching at Kitazono High School. Especially in the context of various practices of foreign language learning at high schools and the efforts of high school students during the COVID-19 Pandemic.

¹ 所属: 獨協医科大学 / 東京都立北園高等学校 Dokkyo Medical University / Tokyo Metropolitan Kitazono High School

Keywords:

plurilingual education, German language teaching, international exchange, PASCH

1. はじめに

筆者が非常勤講師として勤務する東京都立北園高等学校(以下、北園高校)では、1年次より第二外国語自由選択科目としてドイツ語、フランス語、中国語、ロシア語を学ぶことができる。さらに、ドイツ語については3年次に選択必修科目として英語に代わってドイツ語を選び、ドイツ語で受験に備えるドイツ語専修クラスも存在する。北園高校のドイツ語教育についてはこれまでも折に触れて述べてきたが²、本稿では近年の同校のドイツ語教育の発展と新たな取り組みについてまとめる。

2. 高等学校における複言語教育の意義

2.1 高等学校における英語以外の外国語教育について

本題に入る前に、高等学校における英語以外の外国語教育に関する現状を概観する。文部科学省(以下、文科省)の最新の発表によると、平成30年5月の時点において英語以外の外国語を開設している学校数(実数)は全国で677校ある。また、英語以外の外国語の学習者の総数は44,753人となっている。以下の表は、平成13年～30年までの文科省のデータを基に能登(2019, 221)の表を修正、更新したものである。

² 詳しくは以下を参照:

・伊藤直子、能登慶和、前田直子(2011)「都立北園高校におけるドイツ語教育」松岡幸司編『教室という現場から考える日本のドイツ語教育』日本独文学会叢書079号

・能登慶和(2015)『東京都立北園におけるドイツ語教育の実践と今後の展望』複言語・多言語教育研究第3号、69-81

・能登慶和(2019)『都立北園高校のドイツ語教育』日本独文学会コラム(外国語教育)(https://www.jgg.jp/pluginfile.php/310/mod_folder/intro/0159.pdf) (2021年10月30日閲覧)

表 1 高等学校において英語以外の外国語科目を開設している学校数

	H13年	H15年	H17年	H19年	H21年	H24年	H26年	H28年	H30年
公立	382	432	504	561	540	502	512	478	476
私立	216	221	244	227	189	209	194	196	198
国立	0	0	2	2	2	2	2	3	3
計	598	653	750	790	731	713	708	677	677

表 2 高等学校における英語以外の外国語科目の学習者数

	H13年	H15年	H17年	H19年	H21年	H24年	H26年	H28年	H30年
中国語	17,849	19,045	22,161	21,264	19,751	22,061	19,106	17,210	19,637
韓国・朝鮮語	4,587	6,476	8,891	8,865	8,448	11,441	11,210	11,137	11,265
フランス語	8,621	8,081	9,427	10,059	8,954	8,959	9,214	7,912	6,782
ドイツ語	4,548	4,275	4,198	3,898	2,560	3,348	3,691	3,542	2,860
スペイン語	2,584	2,784	2,688	2,632	2,763	2,421	3,383	3,244	2,863
ロシア語	499	478	462	544	567	549	795	738	933
その他	369	470	529	636	775	549	730	756	413
計	39,057	41,609	48,356	47,898	43,818	49,328	48,129	44,539	44,753

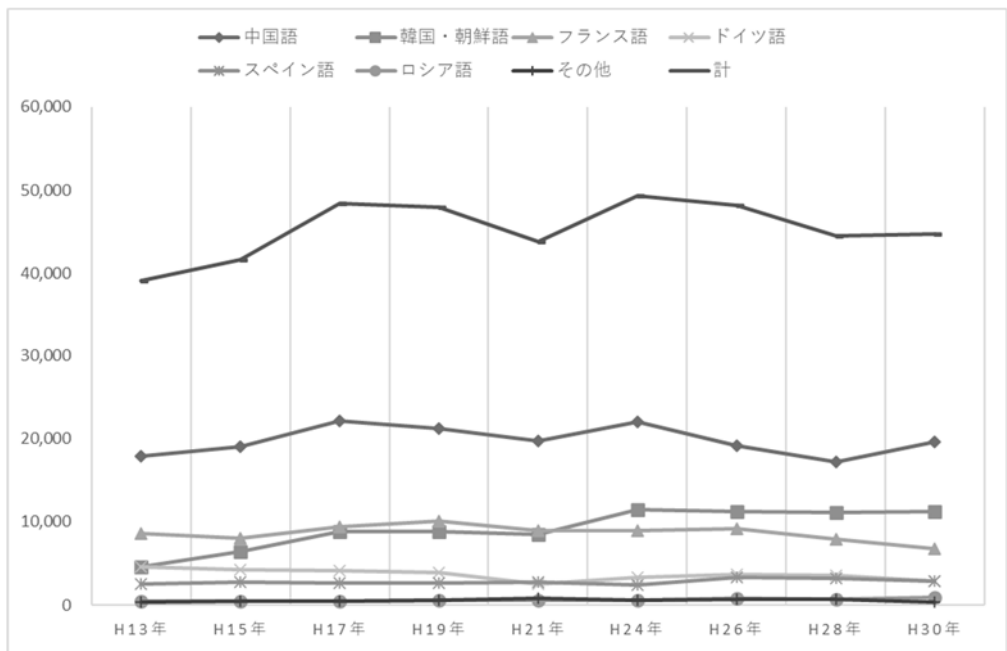


図 1 高等学校における英語以外の外国語科目の学習者数の推移

全体的には多少の増減はあるものの、言語別の学習者の推移を見ると、かつて盛んだったフランス語やドイツ語の学習者は減り、中国語や韓国・朝鮮語など近隣諸国の外国語学習者の増加が目立つ。

2.2 グローバル化が加速する日本

次に、日本における在留外国人の推移について見ていこう。図 2 は、法務省出入国在留管理庁³の統計を基に筆者が作成したグラフである。

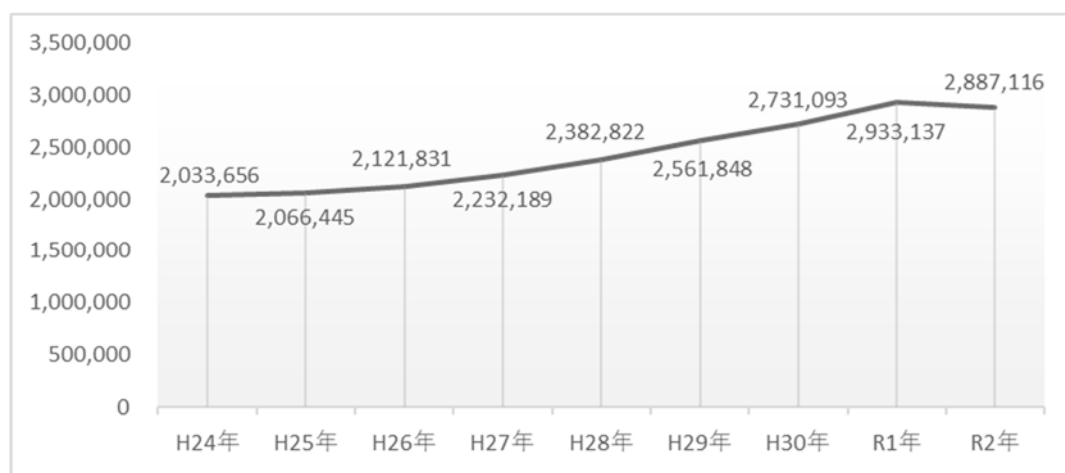


図 2 日本における在留外国人の推移

グラフを見て分かるとおり、日本に在留する外国人の数は、新型コロナウイルスの影響を受けた令和 2 年を除いて、右肩上がりである。令和元年に施行された改正出入国管理法の影響により、今後はパンデミックの終息を経てとりわけ労働分野においてさらに多くの外国人が日本を訪れることが予想され、日本においてもヨーロッパのような多言語・多文化社会が定着する可能性が高いと思われる。

このような状況において、何語であれ自分とは異なる言語を話す他者あるいは多文化との接触はもはや日常において自明のことであり、多言語・多文化共生社会においてそれらを理解しより良い社会を構築していくためには、複言語・複文化主義に

³ https://www.moj.go.jp/isa/policies/statistics/toukei_ichiran_touroku.html (2021年10月30日閲覧)

基づき言葉や文化に対する複眼的な視点を早期のうちに養成することは必要不可欠な課題と言える。

3. 北園高校のドイツ語教育の発展と「パッシュ PASCH」

3.1 伝統ある第二外国語教育

北園高校の第二外国語教育には長い伝統があり、戦後間もない 1947 年にまずドイツ語とフランス語、次いで 1948 年に中国語、そして 1964 年にロシア語が開講された。北園高校ではこれら 4 つの第二外国語から 1・2 年次に自由選択科目として 1 つの言語を 2 年間継続履修することができる。また、3 年次にも自由選択科目として第二外国語を選択することができるが、これらは例年定員(原則 10 名)を満たすことができなく、開講されることは稀である。さらに、冒頭で述べた通り、ドイツ語については 3 年次に選択必修科目としてドイツ語専修クラスが設けられているが、これも極端に希望者が少ない場合は開講されないこともある⁴。以下の表は、同校における 2009 年から現在までの第二外国語の履修者数をまとめたものである。

表 3 北園高校における第二外国語履修者数の推移(全校生徒約 960 名)

	H21年	H22年	H23年	H24年	H25年	H26年	H27年	H28年	H29年	H30年	R1年	R2年	R3年
ドイツ語	73	106	137	178	205	216	229	251	243	179	141	122	152
フランス語	77	66	82	131	75	94	88	74	68	75	102	97	89
中国語	88	94	82	145	113	66	42	50	60	78	83	74	96
ロシア語	19	22	20	16	25	28	33	32	20	19	22	22	18
合計	257	288	321	470	418	404	392	407	391	351	348	315	355

見ての通り、ドイツ語は第二外国語の中で最も履修者数が多く、とりわけ 2010 年度以降に急増したことが見て取れる。これは、次に述べるドイツ外務省プロジェクト「パッシュ PASCH」との関連によるところが大きい。

3.2 ドイツ外務省プロジェクト「パッシュ PASCH」

「PASCH (Schulen: Partner der Zukunft / 学校: 未来を拓くパートナー)」はドイツ連邦外務省が 2008 年にスタートさせたプロジェクトである。本プロジェクトは、ゲーテ・

⁴ 過去 10 年間では 2012 年度および今年度 2021 年度は希望者が 1 名しかおらず、残念ながら講座として成立していない。

インスティトゥート等の機関の支援のもと世界で 2000 校以上の学校をネットワークで繋ぎ、「ドイツ」をキーワードに言語教育の推進や国際問題への対応などに注力している⁵。日本では 2008 年に国立木更津工業高等専門学校、2009 年に獨協中学・高等学校および早稲田大学高等学院、2010 年に北園高校がパートナー校として認定された。その後 2020 年には国立木更津工業高等専門学校に代わって埼玉県立伊奈学園総合高等学校が新たなパートナー校として加わった。PASCH の活動は多岐にわたるが、ここでは毎年行われるプロジェクトの中核を担う活動に絞って記述する。

3.2.1 青少年短期語学研修 Jugendkurs(JUKU)

JUKU は PASCH の目玉とっていい活動で、世界でドイツ語を学ぶ生徒たちが毎年ドイツに参集し、約 3 週間にわたってドイツ語の授業や数多くのレクリエーション活動、自国の文化紹介などを通じて交流を図るものである。これにはゲーテ・インスティトゥートによるドイツ語検定試験 (Common European Framework of Reference for Languages:CEFR の共通参照レベルに基づく A1~A2) の選抜を経て、日本では全体で 8 名の生徒が奨学金を受けて参加する。残念ながら、コロナ禍において 2020 年度および 2021 年度はオンラインでの研修となったが、とりわけ現地でのプログラムに参加した生徒が本研修から得るものは大きく、その後の進学や人生に強く影響を与えることも十分に考えられる。

3.2.2 生徒新聞 Schülerzeitung「Japan Heute」

生徒新聞「Japan Heute(日本のいま)」は、各 PASCH 校でテーマを持ち寄り日本語とドイツ語で記事を書いて最終的に冊子として印刷される。一部のドイツ語記事はオンライン化され、Web 上で世界に向けて発信されている⁶。テーマは日本の四季に合わせた伝統行事、各学校の紹介、日本の食文化、各種 PASCH 活動への参加報告などが挙げられる。生徒新聞作成にあたってはその都度ゲーテ・インスティトゥートによってワークショップが実施され、生徒たちはテーマについて議論したり、ドイツのイースターやオクトーバーフェストなどについて簡単な異文化体験をすることもできる。ドイツ語記事の執筆にあたっては教員のサポートが欠かせないが、生徒のライティング能力の向上に大きく寄与している活動と言えるだろう。

⁵ ゲーテ・インスティトゥートホームページ参照 : <https://www.goethe.de/ins/jp/ja/spr/eng/pas.html> (2021 年 10 月 30 日閲覧)

⁶ <https://blog.pasch-net.de/pasch-global/categories/21-Japan-heute> (2021 年 10 月 30 日閲覧)

3.2.3 ドイツ企業訪問 Unternehmensrally

これは東京および東京近郊に所在地を置くドイツ企業を訪問し、企業説明を受けたり施設見学をしたりする企画である。もともと、生徒たちは単に企業を訪問して説明を受けるだけでは受け身的な活動に終始してしまうため、事前に自分たちで企業について情報を収集してプレゼンテーションとしてまとめ、現地で発表して質疑応答用の質問も考えておく必要がある。これによってプレゼンテーションスキルやコミュニケーション能力の向上も期待される。

これまでの主な訪問先は、ZEISS、BOSCH、MERK、SAP、BMW、Volkswagen、Mercedes-Benz、Lufthansa などが挙げられる。コロナ禍においては状況に応じてオンラインと対面での対応が柔軟に行われている。なお、今年度の企業訪問には、北園高校の卒業生の一人が在職しているドイツ・ミュンヘンにある Enobyte 社とのオンライン企業訪問も予定されている。また、これら企業の他に、ドイツ大使館訪問も合わせて行われている。

4. 国際交流事業

4.1 世界を学ぶ北園高校

現在北園高校は東京都教育委員会から「学校間交流推進校」および「国際交流リーディング校」に指定されており、第二外国語における外国語指導助手 (Assistant Language Teacher: 以下、ALT) の拡充やオーストラリアおよびドイツとの国際的な学校間交流を積極的に行っている。ドイツ語では 2018 年より ALT を設置し、生徒たちが授業を通じて生のドイツ語に触れる機会を設けている。現在はドイツ語以外にも、フランス語および中国語の ALT が設置され、それぞれの言語において特色を生かした教育が展開されている。以下では、ドイツとの学校間交流について簡潔に述べる。表 4 は北園高校とドイツのギムナジウムとの交流記録一覧である。

表 4 北園高校とドイツのギムナジウムとの交流

学校名	所在地	交流開始	交流内容
Freihof-Gymnasium	バーデン・ヴュルテンベルク州ゲッピンゲン	2011年～2015年	相互訪問
Teletta-Groß-Gymnasium	ニーダーザクセン州レーア	2013年～	相互訪問、メール交流
Robert-Schuman-Gymnasium	ザールラント州ザールルイ	2020年～	メール交流

4.2 Freihof-Gymnasium との交流

Freihof-Gymnasium はドイツ南部バーデン・ヴュルテンベルク州ゲッピンゲンにあるギムナジウムである。北園高校と同ギムナジウムは PASCH ネットワークを通じて、2011年に交流を開始し、北園生は隔年ごとにドイツの現地で行われる国際生徒交流会に参加してきた⁷。この交流会には北園生の他にも、イタリア、ウクライナ、タイなどの複数国からの生徒が参加しており、互いの異文化に触れる良い機会となっていたが、現在は日程の都合上などにより残念ながら Freihof-Gymnasium との学校間交流は途絶えている。

4.3 Teletta-Groß-Gymnasium との交流

Teletta-Groß-Gymnasium (以下、TGG) はオランダとの国境に近いドイツ北西部のニーダーザクセン州レーアにあるギムナジウムである。北園高校と TGG も同様に PASCH ネットワークを通じて 2013 年に交流を開始し、以来今コロナ禍を除いて隔年ごとにそれぞれの現地で毎年 10 名前後の人的交流を実施してきた。北園生が TGG を訪問する場合は概ね 8 月末の 1 週間であるのに対して、TGG の生徒が北園高校を訪問するのは 10 月末から 11 月にかけての約 1 週間である。期間中はお互いホストファミリーと共に過ごし、それぞれの学校の授業に参加したり、近郊の観光を行ったりと、双方の文化の特色を生かしたワークショップなども行っている。TGG にはいわゆる「日本語会」という活動があり、日本語が堪能な Ulf Rott 校長の指導の下、平仮名、カタカナ、漢字の学習や、簡易的な日常のコミュニケーションの練習などが行われている⁸。

4.4 Robert-Schuman-Gymnasium との交流

Robert-Schuman-Gymnasium (以下、RSG) はフランスとの国境に近いドイツ西部ザールラント州ザールルイにあるギムナジウムである。RSG もやはり PASCH ネットワークを通じて北園高校と接触を図り、2020 年より交流を開始した。もともと、昨年度から続くコロナの影響で実質的な人的交流にはまだ至っていないが、パンデミック終息後

⁷ 2011 年当初はベルリン日独センターによる日独高校生交流「たけのこプログラム」を通じて金銭的支援を受けたが、後述する学校間交流とともに、基本的にはこれらの交流にかかる費用は生徒の家庭の自費負担である。

⁸ TGG ホームページ参照：<https://www.tgg-leer.de/angebote/japanisch-ag/japanisch-ag.html> (2021 年 10 月 30 日閲覧)

に開始できるように双方で準備を整えている。

4.5 コロナ禍での国際交流の模索

このような状況の中で、北園高校、TGG、RSG の教員らには何かしらの交流が可能かどうかを模索し、2021年7月には3校の教員および生徒をオンラインで繋ぎ、日本語とドイツ語を交えて簡単な自己紹介をするなどして相互の交流を図った。その後、各校から参加者を募って日本語とドイツ語によるメール交流を開始することとなり、北園高校から14名、TGGから17名、RSGから21名、総勢52名の生徒たちが参加する大きなプロジェクトとなった。メール交換に際してはそれぞれの学校の生徒をグループ分けして他校の生徒と組み合わせ、テーマ(初回は自己紹介、以降はハロウィン、年末年始などを予定)を設定して日本語とドイツ語で相互にやり取りをして交流する予定である。

5. 新たな取り組み

5.1 ドイツ・パッシュクラブ

2021年4月より、北園高校では正式な部活動として「ドイツ・パッシュクラブ」が発足した。それ以前にも自主的な活動としてのドイツ語クラブは存在しており、授業内容の補習、異文化理解教育、あるいは検定試験に対する準備講座などが行われていたが(Idenawa, Fukushima, Pahl 2021)、今般正規の部活動として認められたことで、PASCHの各種プロジェクトに関わることも含めて日々の活動内容を充実させることが可能となった。

現在は3年生2名、2年生5名、1年生2名の9名が同クラブに在籍し、主にALTの指導のもとでクリエイティブ・ライティングという活動を行っている。クリエイティブ・ライティングでは、生徒たちが中心となって架空の物語のストーリーを考えることから始まる。そして、そのストーリーに基づき、主人公および登場人物のキャラクターを設定し、それらのイラストも自分たちで作成する。すなわち物語を全て自分たちで創造して一つの作品として仕上げるというものである。これらの成果は、ゲーテ・インスティテュートと協働のうえ、先述したPASCH生徒新聞に掲載される予定である。実際にPASCHの活動についてはこれまで授業外で別途時間を設けて取り組む必要があったが、クラブの発足によってPASCHとの連携もより充実したものとなるだろう。

5.2 文化祭大規模展示

北園高校文化祭(以下、柗祭)は生徒にとって準備活動から実施に至るまで特に力を入れた学校活動の一つである。2021 年度柗祭には部活動として初めてドイツ・パッシュクラブも参画した。今回のクラブのテーマはドイツおよびドイツ語圏の紹介であり、生徒たち自らがドイツ、オーストリア、スイスの特徴や文化について何枚もの模造紙にまとめ、それらを教室一面に展示した。さらに、この展示会場においては、他の生徒や教員を招き、クラブに在籍する生徒自身によってドイツ語の簡単な模擬授業も行われた(図 2)。



図 2 柗祭ドイツ・パッシュクラブ展示会場の様子

コロナ禍のために今回の柗祭は残念ながら一般公開されることはなかったが、このような部活動としての取り組みがドイツおよびドイツ語の魅力伝えるだけでなく、学んだ知識の応用や定着へと繋がっていくのではないだろうか。今後はさらに活動の幅が広がり、部員も増えることで、ドイツ・パッシュクラブが北園高校のドイツ語教育における新たな伝統の一環として発展することが望まれる。

6. おわりに

冒頭にも述べたとおり、私たちは今や多言語・多文化社会の中に生きるということ強く意識しなくてはならず、その中で英語以外の外国語を含めた複言語・複文化教育は今後の日本の発展にとっても重要な役割を担う分野であろう。しかしながら、英語偏重主義的な社会は依然としてその性格を失うことはなく、昨年度は大学入学共通テストにおける英語以外の外国語科目をめぐる各種団体が大学入試センターへ要望書を送る事態となった(山崎 2020)。筆者が所属する高等学校ドイツ語教育研究会も、日本独文学会下部組織であるドイツ語教育部会との連名で同センターへ要望書を届けたが、そこに載せられた「卒業生の声」はいずれもかつて北園高校でドイツ語専修クラスを経て主に独文・ドイツ語学科系の大学へと進学した卒業生た

ちによる切実な声である。その内容から、現在は一社会人として働く彼ら・彼女らの中で、北園高校でのドイツ語学習に始まった第二外国語との出会いがいかに大きな影響を与えたかということが読み取れる。このような大切な声を潰すことのないよう、私たち各教育機関に所属する教員は今後も声を上げ続けるとともに、それぞれの環境で生徒たちの多様な学びの可能性を尊重し、彼ら・彼女らと協働で特色ある教育を展開していくことが重要であると考えます。

引用文献

- 能登慶和(2019)「高等学校での学びと『めやす』」田原憲和編『他者とつながる外国語学習をめざして—「外国語学習のめやす」の導入と活用—』三修社, pp.220-229.
- 山崎吉朗(2020)「大学入学共通テストへの要望—大学入試センター、文科省への要望—」『複言語・多言語教育研究』第8号, pp.194-209.
- Yusuke Idenawa, Ryota Fukushima, Christian Pahl (2021). “PASCH-Deutschklub an der Kitazono Oberschule”.『高等学校ドイツ語教育研究会会報』第31号, pp.36-44.